様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：２３９０３
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2009～2013
課題番号：２１３２００２４

研究課題名（和文）東アジアにおける仏教と神信仰との融合から見た日本古代中世の神仏習合に関する研究

研究課題名（英文）The Research of Ancient and Medieval Japanese Kami and Buddha Amalgamations from the Viewpoint of Fusions between Buddhism and Gods in East Asia

研究代表者
吉田　一彦（Yoshida, Kazuhiko）

名古屋市立大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：４０２３０７２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　11,900,000円、（間接経費）　3,570,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本の神仏習合の成立と展開について考察し、それを日本一国史の中で内在的に理解するのではなく、アジア東部における仏教と神信仰の融合の中で考え、この地域の宗教文化の中に日本の神仏習合を位置づける作業を行なった。この視座から以下の点を明らかにした。①『日本書紀』に記される仏教と神信仰の対立の話は創作性が高く、歴史的事実を伝えるものとは評価できない。②比叡山、白山などの神仏習合の聖山は、中国の神仏融合の聖山である天台山や五臺山の強い影響を受けて成立した。③「本地」の思想は真言宗の護持僧によって考え出されたもので、日本の「本地垂迹説」は11世紀前半に成立した。

研究成果の概要（英文）：This research considered the establishment and development of amalgamations between kami and buddhas in Japan. Formerly these amalgamations were analyzed from a Japanese national history perspective, but we researched within East Asian regional religious culture. The following points became clear:1.Discussions of conflict between Buddhism and kami belief in the Nihon Shoki were highly creative and did not reflect historical facts. 2.These amalgamations at sacred mountains such as Mt. Hieizan and Mt. Hakusan were strongly influenced by Mt. Tiantai and Mt. Wutai, Chinese sacred mountains that were sites of the fusion between gods and buddhas. 3. Honji--original state-- thought was invented by Shingon sect gojiso--guardian monks--,and Japan's honjisuijaku --manifestation from the original state-- theory came into existence during the former half of the 11th century.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・思想史

キーワード：神仏習合　仏教史　文化交流　本地垂迹　山の宗教　宗教儀礼　日本書紀　神信仰

１．研究開始当初の背景

（1）神仏習合は、日本の思想史、文化史の大きな研究課題であり、これまで数多くの研究が行なわれてきた。研究代表者は1996 年に「多度神宮寺と神仏習合」（梅村喬編『古代王権と交流　4 伊勢湾と古代の東海』名著出版）を発表して、神仏習合の内在成立展開説を批判し、日本の神仏習合は中国における仏教と神信仰の融合の強い影響を受けて成立、展開したものであることを論じた。これは津田左右吉の萌芽的な指摘を、あらためて史料を提示して本格的に論じたものであった。
（2）この学説は、幸いにも各方面から好意的なご評価をいただき、その後こうした視角からの研究が行なわれるようになった。歴史教育では、代表的教科書の一つ『詳説日本史Ｂ』（山川出版社）の 2005 年版を見ると、「神仏習合」は天平文化のところに移動し、注で中国の神仏融合思想の影響のことが記されるようになっており、研究代表者の学説が取り入れられた記述に変わっている。
（3）研究代表者は、また、2006 年の『古代仏教をよみなおす』（吉川弘文館）で、この見解をあらためて論じるとともに、「本地垂迹説」の成立過程の解明を行ない、2006 年の「垂迹思想の受容と展開」（速水侑編『日本社会における仏と神』）で垂迹思想の受容について論じた。これは日本の「垂迹」の思想は中国の「垂迹」の思想を受容することによって開始され、やがてそれが国内で変化をとげて「本地垂迹説」へと展開していったと論じ、その道筋を示すものであった。垂迹思想の受容に関するこの見解は、美術史研究の分野で好意的に受け止められ、2007 年の奈良国立博物館「神仏習合」展では、この学説を大幅に取り入れる形で企画展が組まれた。
（4）このように研究代表者が示した発想の転換――日本の神仏習合を東アジアにおける仏教と神信仰の融合の文化の中で、他の国や地域と比較しながら考察し、共通性と差異を明らかにするという見解は、今日しだいに学界で共有されるようになってきたと考える。

２．研究の目的

（1）本研究は日本の「神仏習合」の成立とその時代的変遷を明らかにしようとするものである。その際、神仏習合の成立と展開を、日本列島内での内在成立・展開史としてとらえる立場をとらず、東アジアの文化交流史の中でとらえる立場をとる。神仏習合は、かつては日本独自の宗教文化であり、日本列島内で自律的に形成され、発展してきたものと考えられてきた。しかし、中国にも仏教と神信仰の交流、融合は見られるし、朝鮮半島にも見られる。中国の仏教文献には、日本の神仏習合の源流と理解される記述が見られ、日本の神仏習合が中国の神仏関係の影響を受け、それを受容、導入して開始されたことが知られる。
（2）このことについて、研究代表者は二、三の研究論文を発表したが、ただ、まだその一部について解明したにすぎない。中国や朝鮮半島における神仏の融合と日本の神仏習合とを比較対照し、その具体的な様相と文化交流の実相、そして時系列に即した変遷の過程を、個々の事象にそくして明らかにする作業はなお課題として残されている。
（3）本研究では、日本の神仏習合を東アジアの宗教文化の展開史の中でとらえ、その特質を東アジアの他の国家、地域の神仏の融合と比較しながら考察する。この作業を通じて、はじめて日本の神仏習合の成立過程が明らかになり、またどの部分に差異が見られるかを明らかにすることによって、日本の神仏習合の個性と特色が解明されると考える。

３．研究の方法

（1）研究の一つの中心は文献研究である。具体的には、日本の史料と中国の史料、朝鮮半島の史料を比較研究し、そこに見られる神仏の融合の様相、宗教的聖地のあり方、具体的な信仰のあり方などについて、共通性と差異を明らかにする。
（2）二つ目は彫刻・絵画資料の比較研究である。特に、神の造形の問題は重要であるのだが、これまでこの視角からの研究はほとんどなされてこなかった。日本の神像を中国・朝鮮の神を描いた絵画・彫刻と比較してその影響関係を考察すること、また日本に残る伽藍神像の中国における源流を探求するという研究はまだはじまったばかりである。この研究では、絵画・彫刻の美的価値に焦点をあてる美術史的研究方法ではなく、造形の思想的な系譜と影響関係を解明する思想史的研究方法から探求していく。
（3）三つ目は仏菩薩と神々とがともにまつられる聖山の比較研究である。日本には、比叡山、高野山、白山、立山など、仏菩薩と神々とが並びまつられる聖なる山がいくつもある。それらについて、かつては、日本的な宗教現象とされ、日本的な神信仰・宗教風土の中で、仏教と神信仰の習合が進展して国内で内在的に成立したものだとする理解がしばしば説かれた。しかし、中国にも、韓国にも、仏菩薩と神々とをともにまつる聖地としての山が多数存在し、人々の信仰を集めてきた。この研究では、それらの比較研究を進め、影響関係や差異を明らかにする。
（4）以上の（1）（2）（3）の研究には実地調査が不可欠になる。本研究では、国内調査、国外調査を積極的に実施して比較研究を進

めていく。

４．研究成果

（1）『日本書紀』の仏教伝来記事に始まる一連の神仏関係記事は、同書の編纂者（執筆者）によって創作されたものと見るべきであることを、日中の資料を比較対照して実証的に明らかにした。『日本書紀』には、日本に仏教が伝えられると、仏教受容派と仏教反対派（廃仏派）とが対立、抗争したとする記述がある。これまで、これらの記述は六世紀の歴史的事実を伝えるものだと評価する見解が根強かった。しかし、これらの記事は中国の仏書の記述や表現、また末法思想とその論理を用いて叙述されており、『日本書紀』の編纂過程で、編纂者（執筆者）によって創作された記事だと評価すべきである。このことを日中の史料を比較対照して明らかにし、これらの記事を六世紀の宗教史の史料としてではなく、『日本書紀』が書かれた八世紀初頭の思想史の史料として位置づけるべきであることを論じた（吉田一彦『仏教伝来の研究』）。

（2）比叡山には延暦寺とともに日吉社がある。こうした神仏をともにまつる聖山のあり方は、中国の天台山における神仏をともにまつるあり方を模倣、導入して開始されたものであることを明らかにした。天台山では早くから仏教が隆盛するとともに山の神に対する信仰が存在した。最澄は入唐して天台山で仏菩薩と神々とがともにまつられる様相を実見し、帰国後、神がまつられる山である比叡山に比叡山寺（延暦寺）を建立し、寺と神社が並びまつられる形態を創始した。これは神仏の聖山であった天台山のあり方を日本に模倣、導入したものであった（吉田一彦「最澄の神仏習合と中国仏教」）。

（3）白山の開創は、通常説かれる、泰澄によるものと見るべきではなく、九世紀の僧である宗叡によるとすべきであること、および白山の開創にあたって、中国の聖山である五臺山のイメージが重ねあわされていることを明らかにした。宗叡は最初天台宗の僧として活動し、のち真言宗に転じて入唐、帰国し、清和天皇（のち太上天皇）を護持する役割をつとめて僧正にのぼった僧である。『日本三代実録』の宗叡の卒伝には、彼が白山を切り開く活動を行なったことが明記されている。また、白山での彼の活動が五臺山の著名な霊異の説話と重ね合わされるように描写されており、白山が五臺山のような聖山として開創されたことが判明する。このことを日中の史料から実証的に明らかにした（吉田一彦「宗叡の白山入山をめぐって」）。

（4）日本の初期の神宮寺について、近年発見された史料の知見を加味してその特質を論じた。具体的には、北陸道に展開した初期神宮寺である若狭神宮寺、気比神宮寺、剱御子寺、気多神宮寺を取り上げた。富山県高岡市の東木津遺跡から出土した木簡には「気多大神宮寺」と記したものがあって注目される。この木簡の「□暦二季」の記述は延暦二年（783）と判断される。また、剱神社には「剱御子寺鐘」という銘を持つ神護景雲四年（770）の梵鐘が存在し、注目される。ここでは、これら初期の神宮寺に関する史料を近年発見のものをも含めて網羅的に収集して分析し、その特質を明らかにした。（脊古真哉「北陸道の初期神宮寺」）。

（5）日本の「本地垂迹説」は11世紀前期に成立したものであり、真言宗の東密小野流の僧によって創案された思想であることを明らかにした。京都市山科区の随心院が所蔵する『護持僧作法』は、宮中における夜居の作法について記したもので、師から伝えられた教えを勝覚という真言宗の僧が記述した注目すべき史料である。この史料には、他に先駆けて「本地」の用語、思想が見られることが注目され、「本地垂迹説」が記された最初期の文献としてはなはだ貴重である。ここに記された作法は「元杲―仁海―成尊―範俊―勝覚―定海」と伝えられていった真言宗東密小野流の説と理解される。ここから、日本の「本地垂迹説」がこの流派の護持僧によって説かれたもので、11世紀前期に成立したものであることが判明した。護持僧は二十一社の本地の「本地呪」を唱え、また大日如来・天照大神・天皇の同体説を説いた。中世仏教発展の原動力の一つはいかに日本の神々を包摂した仏教世界観を構築するかにあった。中世の神仏習合の具体相を論じ、その特質を明らかにした（上島享『日本中世社会の形成と王権』）。

（6）神仏習合と密接な関係にある聖徳太子信仰の特質を四天王寺対法隆寺という寺院の対立構造を基軸に明らかにした。聖徳太子信仰は、仏教と人神信仰とが融合したものであり、日本における宗教の融合の姿の一つを示す重要な宗教現象と位置づけられる。ここでは、聖徳太子信仰の成立と展開を四天王寺と法隆寺、また広隆寺と橘寺の対抗関係を座標軸にとって検討し、異説、異伝の成立を各寺院の対抗主張と評価する観点からこの信仰の特質や複数の伝記の性格などについて分析した。次に、聖徳太子像の造形について、観音菩薩の垂迹という観点から分析し、記号としての垂髪の意味について論じた。また、今日に伝わる種々の聖徳太子絵伝が四天王寺系、南都系、法隆寺系の三系統に区分できることを明らかにし、その絵相の差異を系統別に明確化した。さらに、親鸞の仏教の特質が阿弥陀信仰と聖徳太子信仰の結合にあることを指摘し、四天王寺における阿弥陀信仰と聖徳太子信仰の結合が親鸞の仏教に強い影響を与えていることを指摘した。あわせて『異本聖徳太子伝』の写本（日大本と広大本の二本あり）の現状と史料としての性格について考察した（吉田一彦編『変貌する聖徳太子』、吉田一彦「垂迹としての聖徳太子」、脊

古真哉「聖徳太子絵伝の世界」)。
（7）中国の出家得度制度と日本の出家得度制度を比較してその共通性と差異とを明らかにした。東アジアにおける仏教の出家、得度、受戒のシステムとその思想については、いまだ明らかではない部分が多い。ここでは、まず「官度」「私度」「自度」といった得度に関する基本的用語の理解について、これまで大きな誤解があったことを指摘した。中国では、「度」とは自らが得度するという意ではなく、他者を得度させるという意で用いるのが一般的な使用法で、家が、あるいは国家が人を得度させるところに基本の意味があった。これまで「私度」の語については誤った理解がしばしば説かれてきたが、それを訂正し、これらの語の正しい理解を提示した。次に、『出家功徳経』という経典に注目し、人を出家させると、（出家した人自身というより）、出家させた人に功徳があるとする思想が説かれていたことを明らかにした。東アジアにおける出家、得度の思想を理解するには、こうした思想を踏まえて理解する必要があり、臨時得度についてもこの文脈からとらえるのが正しい意味づけになる。こうした新知見に立脚して、中国と日本の出家、得度の制度を比較対照し、その共通性と差異を明らかにした（佐藤文子「古代の得度に関する基本概念の再検討」「臨時得度の政治思想」「仏教制度の輸入と日本化」）
（8）日本では中世になると、「修正月」「修二月」の仏教儀礼が初夜、後夜の二時の法会として広く挙行され、それらには芸能がともなった。中世社会では、こうした仏教の法会が荘園制の進展と連関して地域社会に浸透し、神社で法会が実施されるなど神仏習合の要素をともないながら発展していった。ここから、仏教儀礼の地域への展開と神仏習合の進展には密接な関係があることを明らかにした。また、現代に伝わる民俗行事の中に中世にはじまる神仏習合の儀礼の要素がしばしば残存していること明らかにした。愛知県岡崎市滝町の滝山寺では、新春行事の鬼祭が実施されている。これは仏教の修正会の系譜を引く儀礼であり、神仏に対する融合的な信仰のもとに行なわれている。その現在の状況と歴史的系譜について、実地調査の成果をふまえて明らかにした（上島享「日本中世社会の形成・展開と修正会・修二会」、脊古真哉「滝山寺の鬼祭」)。
（9）位置づけとインパクト
私たちの研究チームが提起した、仏教と神信仰の融合に関する見解は、学界に少しずつ確実に共有されるようになっていると認識している。私たちの議論は、日本の神仏習合を日本国内で内在的に成立、展開した、日本的な宗教現象として理解するのではなく、国際的な広がりを認識し、その中で時系列にそった歴史的展開を考察し、文化交流の進展をふまえて理解しなければならないとするものであるが、それはまた新しい人文学の方法論の提起でもあった。
こうした宗教文化の国際交流や神仏の融合に着目した研究は、近年着実な広がりを見せるようになっている。アジアにおける仏教史の展開に関する最新の概説書のシリーズである〈アジア仏教史〉では、巻 11 の『日本篇Ⅰ　日本仏教の礎』において、こうした視座から吉田一彦、上島享の論が執筆され、また神仏習合を扱った章である門屋温「神仏習合の形成」において、私たちの見解を吸収した論が展開されている。これらから、神仏習合研究が、私たちの研究チームの視座によって新しい研究段階に入りつつあることが実感される。
（10）今後の展望
本研究を実施して、研究の次の段階への発展の方向性を構想することができた。そのカギとなるのは、対象とする地理的範囲の拡大である。本研究では、「東アジア」という対象範囲を設定し、日本と中国、韓国の文化交流の中で比較研究を行なった。しかし、研究が進展するごとに、ベトナム、北アジア、敦煌、チベットなど中国の周辺地域（国）に広がる神仏の融合には、日本や朝鮮半島と共通する要素が多く見られることに気づいた。今後は、「東アジア」からアジア東部、東部ユーラシアへと対象範囲を拡大し、その宗教史の中に日本の宗教史を位置づける研究に取り組んでいきたい。
それは、日本の文化や歴史の特質を東部ユーラシアの中に、さらには世界史の中に位置づけるという議論に発展していく可能性を秘めている。今後は、研究チームに、アジアの民間信仰研究、北アジア仏教史、敦煌の文学・文化研究、日中の美術史研究などを専門とする研究者にご参加いただき、さらに研究を発展させていきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 20 件）
①吉田一彦「アジアにおける神仏の融合と日本―台湾の廟と寺をたずねて―」『在家仏教』740、査読無、2014、9-11
②脊古真哉「北陸道の初期神宮寺」『同朋大学仏教文化研究所紀要』33、査読有、2014、37-54
③上島享「勧進と聖―空也像の再検討を中心に―」『立教大学日本学研究所年報』10・11、査読無、2013、86-97
④吉田一彦「契丹（遼）の仏教をたずねて―2012 年度の調査から―」『人間文化研究所年報』8、査読無、2013、52-58
⑤佐藤文子「ベトナムで見た〈国史学〉の足あと―弥次郎兵衛の墓と黒板勝美―」『人間文化研究所年報』8、査読無、2013、59-62
⑥脊古真哉「滝山寺の鬼祭―修正の田遊びと鬼会―」『同朋大学仏教文化研究所紀要』32、

査読有、2013、49-73
⑦吉田一彦「宗叡の白山入山をめぐって―九世紀における神仏習合の進展（一）―」『仏教史研究』50、査読無、2012、1-27
⑧佐藤文子「臨時得度の政治思想」『仏教史研究』50、査読無、2012、28-49
⑨上島享「〈中世仏教〉再考―二項対立論を超えて―」『日本仏教綜合研究』10、査読有、2012、89-116
⑩吉田一彦「韓国の寺院・神仏習合・博物館―2009 年度 2010 年度の調査から―」『人間文化研究所年報』6、査読無、2011、40-50
⑪吉田一彦「古代国家の仏教儀礼と地域社会」『芸能史研究』192、査読有、2011、1-20
⑫上島享「日本中世社会の形成・展開と修正会・修二会―講経法会との対比から―」『芸能史研究』192、査読有、2011、21-31
⑬脊古真哉「静岡県掛川市八坂町宮村道場の初期真宗絵画史料―聖徳太子インド日本高僧連坐影像と阿弥陀如来絵像二幅―」『同朋大学仏教文化研究所紀要』30、査読有、2011、53-66
⑭佐藤文子「古代の得度に関する基本概念の再検討―官度・私度・自度を中心に―」『日本仏教綜合研究』8、査読有、2010、91-107
⑮吉田一彦「中国山西省の寺院と文化財―2009 年度の調査から―」『人間文化研究所年報』5、査読無、2010、41-46
⑯吉田一彦「垂迹としての聖徳太子―早島有毅「聖徳太子信仰と三国仏教史観」によせて―」『同朋大学仏教文化研究所紀要』29、査読有、2010、17-25
⑰佐藤文子「仏教制度の輸入と日本化―得度システムを中心に―」浙江工商大学日本文化研究所編『東アジア文化交流　国際シンポジウム資料集』査読無、2009、60、130
⑱吉田一彦「最澄の神仏習合と中国仏教」『日本仏教綜合研究』7、査読有、2009、11-29

〔学会発表〕（計 11 件）
①吉田一彦「日本の神仏習合をどう考察するか―ルチア・ドルチェ・三橋正編『「神仏習合』再考」を読む―」研究集会・神仏習合の再検討、2013.11.24、名古屋市立大学
②上島享「国際交流と神仏習合」研究集会・神仏習合の再検討、2013.11.24、名古屋市立大学
③佐藤文子「〈国家仏教〉論の生成過程からみた国史学と仏教史学についての学問的考察」仏教と近代研究会、2013.5.25、京都大学楽友会館
④上島享「〈中世仏教〉再考―二元論を超えて―」日本仏教綜合研究学会大会、2011.12.11、関西大学
⑤佐藤文子「平安時代前期における得度受戒制の動向」仏教史学会特別例会、2011.4.16、大谷大学
⑥上島享「中世禅律仏教史像の再構築」戒律文化研究会大会、2011.3.13、西大寺
⑦吉田一彦「古代国家の仏教儀礼と地域社会」芸能史研究会大会、2010.6.6、同志社女子大学
⑧上島享「日本中世社会の成立と修正月・修二月」芸能史研究会大会、2010.6.6、同志社女子大学
⑨佐藤文子「仏教制度の輸入と日本化―得度システムを中心に―」国際シンポジウム・東アジア文化交流―学術論争の止揚をめざして、2009.9.19、浙江工商大学

〔図書〕（計 13 件）
①犬飼隆、和田明美、吉田一彦他『語りつぐ古代の文字文化』（犬飼・和田編、共著）、担当は「過去の支配」、青簡社、2014、211
②桜井英治、上島享他『岩波講座　日本歴史 6　中世 1』（共著）、担当は「鎌倉時代の仏教」、岩波書店、2013、310
③吉田一彦『仏教伝来の研究』（単著）、吉川弘文館、2012 年、353
④村井康彦、大山喬平、佐藤文子他『七条道場金光寺文書の研究』（村井・大山編、共著）、担当は「近世京都における金光寺火屋の操業とその従事者」、法蔵館、2012、545
⑤吉田一彦、脊古真哉他『変貌する聖徳太子』（吉田一彦編、共著）、吉田担当は「序論」「聖徳太子信仰の基調」「『異本上宮太子伝』の写本と内容」「親鸞の聖徳太子信仰の系譜」、脊古担当は「聖徳太子絵伝の世界」、平凡社、2011、347
⑥須田勉、佐藤信、吉田一彦他『国分寺の創建　思想・制度篇』（須田・佐藤編、共著）、担当は「国分寺国分尼寺の思想」、吉川弘文館、2011、386
⑦王勇、佐藤文子他『東亜文化的伝承与揚棄』（中国文、共著）、担当は「仏教制度の輸入と日本化」、中国書籍出版社、2011、425
⑧末木文美士、大久保良峻、吉田一彦、上島享他『新アジア仏教史 11　日本Ⅰ　』（末木他編、共著）、吉田担当は「仏教の伝来と流通」、上島担当は「仏教の日本化」、佼成出版社、2010、477
⑨竹村和子、義江明子、吉田一彦他『ジェンダー史叢書　3　思想と文化』（竹村・義江編、共著）、担当は「国分尼寺と滅罪」、明石書店、2010、284
⑩上島享『日本中世社会の形成と王権』（単著）名古屋大学出版会、2010、950

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
なし

○取得状況（計 0 件）
なし

〔その他〕
博物館等の展示とその図録
①名古屋市博物館、〈文字のチカラ〉展、「文字のチカラ」展実行委員会（名古屋市博物館内）、2014.1～2、吉田一彦が実行委員として

企画、実施に関わり、仏教、神信仰、宗教関係の解説等を担当。
〈図録〉犬飼隆、和田明美、吉田一彦他『文字のチカラ』展図録（共著）、「文字のチカラ」展実行委員会（名古屋市博物館内）、2014、160
②同朋大学仏教文化研究所 2013 年前期展示「聖徳太子信仰の世界」、2013.6～7、脊古真哉が企画実施に関与し、展示、解説、図録作成統括を担当した。
〈図録〉脊古真哉他『聖徳太子信仰の世界』（同朋大学仏教文化研究所編、共著）、同朋大学仏教文化研究所、2013、10

６．研究組織

(1)研究代表者
吉田一彦　（YOSHIDA, Kazuhiko）
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授
研究者番号：40230726

(2)研究分担者
上島享　（UEJIMA, Susumu）
京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号： 60285244

脊古真哉　（SEKO, Shinya）
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・研究員
研究者番号：20448707

(3)連携研究者
佐藤文子　（SATO, Fumiko）
仏教大学・歴史学部・非常勤講師
研究者番号：80411122